

協奏曲の「協」と「競」の世界

吉松隆



藤倉大：ピアノ協奏曲第3番〈インパルス〉(2019年1月18日公演より)
指揮：山田和樹、独奏ピアノ：小菅優 ©読響

協奏曲（コンチェルト）はオーケストラ・コンサートの花形である。ゲストの演奏家が（己の技術と音楽性と経験を駆使して）大人数のオーケストラと丁々発止と渡り合う世界は、名優の舞台を見るような夢の時間と言えるかも知れない。

協奏曲の語源

この「コンチェルト (concerto)」というのは元々はイタリア語。英語の「コンサート (concert = 音楽会)」や「合コン (合同コンパ：company)」と同じで、con-とかcom-と頭に着く（接頭語）のは「みんなが集まって」とか「一緒に何かする」というような意味がある。

ちなみにシンフォニー (symphony) の方のsym-は「ひとつになる」という意味で、大勢で一つの響きを作るから「交響曲」。こちらはドイツ留学した森鷗外が（明治20年代に）日本語訳を作っているが、コンチェルトは、一緒に集まったあと「仲良く揃って」か「互いに競い合って」かで二つの意味があり、「協」奏曲にするか「競」奏曲にするかで議論百出。迷った末、現在の形になったのだそうだ。

ちなみに、協奏曲の曲名は正式には「独奏XXとオーケストラのための協奏曲 (concerto for XX and orchestra)」で、ピアノ協奏曲、

ヴァイオリン協奏曲というのは略式。楽章のない小品（〈ツィゴイネルワイゼン〉など）は「オーケストラ伴奏付きのXX独奏曲」というような長い名前と呼ばれることもある。

協奏曲の歴史

この協奏曲、古くバロック時代には、数人の独奏楽器と弦楽合奏が「仲良く揃って」協奏する「合奏協奏曲（コンチェルト・グロッソ）」として普及。やがて独奏楽器（ヴァイオリン、チェンバロあるいはフルートなど）と弦楽合奏が「競い合う」（独奏）協奏曲も盛んになっていった。早いテンポで華やかに始まり、続いてゆっくりしたテンポで歌心を聴かせ、最後は賑やかなフィナーレで締める、という「急～緩～急」の三楽章の形が固まってきたのもこの頃だ。

次いで古典派のハイドンやモーツァルト、そしてベートーヴェンの時代になると、作曲家がピアノ（あるいはヴァイオリン）を弾き、オーケストラをバックに作曲と演奏の腕前を披露する、という「腕前アピール」的な進化を見せるようになる。

そして、現在の私たちが思い浮かべるような「ソリストとオーケストラが華麗に競演する」コンチェルトの形になるのは、ロマン派以降。ヴァイオリンのパガニーニやピアノのリストなど超絶技巧の名技を聴かせる演奏家が登場し、ショパンやチャイコフスキーらロマン派の作曲家たちが技巧を凝らした華やかな曲を書き始めた。この頃から、作曲者ではなく専門の演奏家がソロを務めることが主流になる。

その後、近現代になると、ピアノ、ヴァイオリン以外にも色々な楽器の名人が登場し始め、彼らにスポットを当てる協奏曲が作られるようになる。チェロやヴィオラなどの弦楽器、フルートやトランペットな



ロドリゴ：アランフェス協奏曲（2016年3月4日公演より）指揮：ユージン・ツィガーン、独奏ギター：朴葵姫 ©読響

どの木管・金管楽器以外にも、オーケストラにはあまり登場しない楽器（ギターやサクソフォンあるいは鍵盤打楽器など）から、ちょっと珍しい楽器（左手のピアノやハーモニカ、オンド・マルトノなど）、さらに世界各地の民族楽器（バンドネオン、シタール、尺八、和太鼓など）の協奏曲も書かれるようになり、コンサートを多種多様な響きで彩るようになった。

カデンツァ——独奏者、作曲家の腕の見せ所

そんな協奏曲の聴きどころの一つは、オーケストラ無しのソロで演奏される「カデンツァ」だ。古典派の時代は独奏者（ほとんどの場合、作曲者）



モーツァルト（古典派）のカデンツァ

が即興で腕前を披露する、いわゆる「ソロのアドリブ」が基本。楽章の後半に登場し、楽譜にはフェルマータ（ $\frown$ ）があるだけで何も書いていないのが普通だった。

しかし、ロマン派以降の作曲家は、演奏家と相談しつつしっかりカデンツァを書くようになる。カデンツァもまた作曲家にとっての腕

の見せ所であり、「即興」だからと言って全然スタイルの違う演奏が延々と始まったら困ることもあったのだろう（それも逆に面白そうな気がしないでもないけれど）。

ちなみに現代では、演奏家や他の作曲家が作ったカデンツァが楽譜として出版されていて、それを演奏することがほとんど。そんな時はプログラムに「XX版のカデンツァを使用しています」などと小さく書かれていることもあるので注目してみよう。

一方、現代になると逆に「もっと自由でもいいんじゃないか」という発想を持つ作曲家も出てきて、楽譜のない本当の「即興演奏」を要求する曲も見かけるようになった。武満徹〈ノヴェンバー・ステップス〉の尺八と琵琶による長大なカデンツァは「図形楽譜」による自由なものだし、私もサクソフ



即興カデンツァ（筆者のトロンボーン協奏曲より）

オン協奏曲やトロンボーン協奏曲では「図形」だけの即興カデンツァを挟んでいる。曲のスタ

イルと世界観の中で「自由に」演奏家を解き放つのも、「協奏」し「競奏」する協奏曲の本来の精神のような気がする（のだが、どうだろうか）。

協奏曲の性格——音楽家たちの心のアンサンブル

そんな協奏曲における「ソロ（個）」と「オーケストラ（集団）」の関係は、時代や作曲家や演奏家の性格が反映していてなかなか興味深い。

真面目に「すべて楽譜通り」を至上とする演奏もあれば、自由な解釈で「（聴衆を）楽しませるのが第一」の演奏もある。すべて暗譜（楽譜を見ない）で弾く演奏家もいれば、しっかり楽譜を凝視する演奏家、「さあ、ついてこい！」とばかりにオーケストラを引っ張る演奏もあれば、逆に「皆さんについて行きます」というスタンスで音楽を作っていく演奏もある。音楽に陶醉して目をつむり異世界を彷徨う演奏もあれば、クールに楽譜通り正確な（ただし、ここぞと言うときにはたっぷりと歌う油断のならない）演奏もあったりする。

そのあたりをコントロールするのは、間に立って双方の手綱を締める役割を持つ指揮者の仕事だ。ソロが自由自在に演奏できるよう支えたり引き立てたりしながら、オーケストラを操縦する。時には「ついて行くのに必死」になったり「音が合わなくて慌てたりする」こともなくはないが、見事な演奏に聴き惚れたあと、最後は心一つにして「熱く盛り上がる」のがお約束だ。

ちなみに協奏曲といえども、最初っから最後までソロが弾きっぱなしというわけではなく、冒頭オーケストラだけの序奏があったり、途中しばらくオーケストラの間奏的な部分があったりと「休み」があるのが普通。そんな時の待っている仕草にも人柄が出るので見逃せない。

コンチェルトの世界は、まさに「協奏」あり「競争」ありの華やかな舞台だ。楽器のキャラクターを120%引き出す作曲家の手腕、ソリスト・指揮者・オーケストラそれぞれの音楽性や技術、そして楽器の音色や性能。そういったものが聴きもの（見もの）なのはもちろんだが、其処此処に現れる音楽家たちの心のアンサンブル。それこそが協奏曲の最大の聴きどころと言えるだろう。

（よしまつたかし・作曲家）

7月の公演

小林が振る《情熱のドヴォルザーク》&クラリネットの名手が共演



7/6 土 第218回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

7/7 日 第218回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮=小林研一郎(特別客演指揮者)

クラリネット=アンドレアス・オッテンザマー

ウェーバー: 歌劇《魔弾の射手》序曲、クラリネット協奏曲 第1番
ドヴォルザーク: 交響曲 第8番

ハンガリーの俊英ナナシと鬼才ピアニストのドゥバルグが初登場!



7/11 木 第590回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮=ヘンリク・ナナシ ピアノ=リュカ・ドゥバルグ

コダーイ: ガランタ舞曲

サン=サーンス: ピアノ協奏曲 第5番《エジプト風》

バルトーク: 管弦楽のための協奏曲

ソロ・ヴィオラの“ヤス”が読響メンバーと繰り広げる充実の室内楽



7/12 金 第22回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール 19:30 (プレ・トークあり)

《鈴木康浩プロデュースの室内楽》

ヴィオラ=鈴木康浩(読響ソロ・ヴィオラ)

ルクレール: 2つのヴィオラのためのソナタ 第4番 ヒンデミッ

ト: 弦楽三重奏曲 第2番 ブラームス: 弦楽五重奏曲 第2番

巨匠トーヴェイが《惑星》を振り、ドゥバルグがラフマニノフを弾く!



7/15 月・祝 第113回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

7/16 火 第624回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

7/17 水 第23回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19:00

指揮=ブラムウェル・トーヴェイ ピアノ=リュカ・ドゥバルグ

女声合唱=昭和音楽大学

ラフマニノフ: ピアノ協奏曲 第2番 ホルスト: 組曲《惑星》

7月公演の聴きどころ

7/6、7/7《土日マチネー》 読響・特別客演指揮者の小林研一郎が登場し、ドヴォルザークの傑作、交響曲第8番を指揮する。第8番は、読響とは2002年以来17年ぶり。小林は、「第8番は、どこを取り出しても魅力的な歌に溢れている。大らかなチェロの旋律や管楽器のヴィルトゥオーソ的な部分も魅力」と語っている。一音一音に熱い魂を込めた熱演で、ドヴォルザークの神髄を聴くことができるだろう。また、協奏曲ではクラリネット界の貴公子A. オッテンザマーと初共演する。オッテンザマーは、わずか21歳でベルリン・フィルの首席奏者に就任し、ソリストとしてもウィーン・フィルと共演するなど、世界で注目を浴びるスター奏者だ。伸びやかな音色と卓越した音楽性で、ウェーバーの傑作を響かせる。

7/11《定期》 2012~17年にベルリン・コーミッシェ・オーパーの音楽総監督を務めたハンガリーの俊英ナナシが初来日し、“お国もの”のバルトークやコダーイの名曲を披露する。ころころ変わる拍子や民俗的なメロディーが印象的なバルトーク《管弦楽のための協奏曲》では、オーケストラの各楽器がソリストのように独創的に扱われており、各奏者の名人芸にも注目だ。また、サン=サーンスが書いた最後のピアノ協奏曲《エジプト風》では、カリスマ性のあるオーラを放つフランスの気鋭ドゥバルグが、異国情緒溢れるメロディーを洗練された技巧で聴かせる。

7/15《みなとみらい》、7/16《名曲》、7/17《大阪定期》 ニューヨーク・フィルやシカゴ響などを振り、長年バンクーバー響の音楽監督を務めたイギリスの巨匠トーヴェイが読響初登場。指揮棒の代わりにライトセーバーを持って《スター・ウォーズ》を指揮するユニークな映像がYouTubeで話題となった。今回はホルスト《惑星》で神秘的な宇宙を創り上げる。“ジュピター”の名旋律は、熱く胸に迫るだろう。また、2015年のチャイコフスキー国際コンクールで話題を呼んだ鬼才ドゥバルグが、ピアノ協奏曲の中でも屈指の人気曲、ラフマニノフの第2番で奥深いソロを奏でて作品の核心に迫る。

(文責:事務局)

シカゴ響、ボストン響などを振る新鋭レーニンガーが初登場！



8/18 日 読響サマーフェスティバル2019《三大交響曲》
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮＝マルチェロ・レーニンガー

シューベルト：交響曲 第7番〈未完成〉

ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉

ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

世界へ羽ばたく3人の若手ソリストが、傑作協奏曲を次々と披露



8/21 水 読響サマーフェスティバル2019《三大協奏曲》
東京芸術劇場コンサートホール 18:30

指揮＝マルチェロ・レーニンガー

ヴァイオリン＝高木凜々子

チェロ＝アレクサンドル・ラム

ピアノ＝アレクサンダー・マロフェエフ

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番

哀愁の旋律と胸に迫る熱い響き！ 尾高のチャイコフスキー〈悲愴〉



8/24 土 第219回 土曜マチネシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

8/25 日 第219回 日曜マチネシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮＝尾高忠明（名誉客演指揮者）

ヴァイオリン＝アナ・マリア・ヴァルデラマ

メンデルスゾーン：序曲〈フィンガルの洞窟〉

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲

チャイコフスキー：交響曲 第6番〈悲愴〉

ロットに光を！ ヴァイグレが隠れた傑作に思いを込める



9/10 火 第591回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮＝セバスティアン・ヴァイグレ（常任指揮者）

チェロ＝アルバン・ゲルハルト

プフィッツナー：チェロ協奏曲 イ短調（遺作）

ハンス・ロット：交響曲

明るいサウンドと軽快なリズムによる華麗なる〈イタリア〉



9/14 土 第114回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

指揮＝セバスティアン・ヴァイグレ（常任指揮者）

ヴァイオリン＝小林孝成

モーツァルト：歌劇〈魔笛〉序曲

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲

メンデルスゾーン：交響曲 第4番〈イタリア〉

ヴァイグレがマーラー第5番を振り、ピアノの巨匠が共演！



9/20 金 第625回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

9/21 土 第220回 土曜マチネシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

9/22 日 第220回 日曜マチネシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮＝セバスティアン・ヴァイグレ（常任指揮者）

ピアノ＝ルドルフ・ブッフビンダー

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第4番

マーラー：交響曲 第5番

お申し込み・お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390（10時～18時・年中無休）<https://yomikyo.or.jp/>

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

インターネットで24時間いつでもお申し込みができ、ご自身でお好みの座席をお選びいただけます。上記URLもしくはホームページのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

※初回お申し込み時は利用登録（無料）が必要です。

■読響×アプリコ公演

6/29_土 15:00
大田区民ホール・アプリコ 大ホール

指揮=大友直人

ピアノ=牛牛(ニューニュー)

ショパン:ピアノ協奏曲 第1番

ブラームス:交響曲 第1番

[料金] S¥4,500 A¥3,500 25歳以下¥2,000

[お問い合わせ] アプリコ チケット専用電話 03-3750-1555(10~20時)

■展覧会「みんなのミュシャ ミュシャからマンガへ——線の魔術」開催記念
読売日本交響楽団プレミアム・コンサート

7/1_月 19:00
Bunkamura オーチャードホール

指揮=藤岡幸夫

サクソフォン=上野耕平

スメタナ:交響詩〈モルダウ〉

ドビュッシー:アルト・サクソフォンと管弦楽のための狂詩曲

ヤナーチェク:〈シンフォニエッタ〉から“ファンファーレ”

ドヴォルザーク:交響曲 第9番〈新世界から〉

[料金] S¥8,800 A¥7,500 B¥6,000

展覧会・鑑賞券+コンサートS席のお得なWチケット ¥9,800

[お問い合わせ] Bunkamuraチケットセンター 03-3477-9999(10~17時半) ほか

■ミュージカル・ミーツ・シンフォニー アナザーステージ
THE GREATEST HITS FROM ABBA

7/26_金 19:00 7/27_土 13:00/17:00

東京芸術劇場コンサートホール

指揮=円光寺雅彦

出演者=ピーター・ジョーバック、グニラ・バックマン、サラ・オレイン、海宝直人

〈マンマ・ミーア〉〈ダンシング・クイーン〉〈SOS〉などABBAの名曲

[料金] S¥9,800 A¥8,800

[お問い合わせ] キョードー東京 0570-550-799(平日11~18時、土日祝10~18時)